

られ、孰れも高處から壯觀を呈して遠くまで人目を惹いたものである。ビールは、立辨法師が之れを見て此の地方にある數多の窳觀波や僧伽藍が拜觀者に偉大な印象を與へることを説いたものだと言つて居るが、誠にそれに違ひないと思はれる。尙ほ、重要な事實として今直に言ふて置くべきことは、法師の見た時には是等の佛殿はまだ立派に保存されてゐたと云ふことである。法師の巡拜に先立つこと百年の昔大族王(摩醯羅矩羅) Mihirakoula が印度西北の佛教建築を餘す所のないまでに破壊し盡した時にも、其の猛威はカピシヤ地方の建築までは及ばなかつたものと見えるが、其の後間もなくアラビア人から受けた初回の侵襲に依て、此の地方の建物も破壊され、匈奴の企てた事業がそれで完成されたのは事實である。

立辨法師は例により、同地方の既況を述べた後、直に首都のことに移つてゐるが、それに依ると其の周圍は十里(三乃至四吉米突)以上に達するものである。扱て、此處では古來數多の遺物が發掘され、子々孫々に至るまで絶えず舊都の昔を偲び、國內でも曾て舊都に關する記憶の消失したことの無い處で